

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第140号 (2023.10.22-2023.10.29)

◆ 参加者：何となく短歌、しまねこくん、朗詠ムメイ、Tatsuo

Kanase、susyu、古城エツ、水の眠り、とるぼとる、小沢史

菊池洋勝、西脇祥貴、うつわ、かれん、花野玖、温(ぎ)、元さ

ん、星野響、馬勝、西沢葉火、豆蔵、天天雷、ゴトー、天やん

karashi、H、雷(らい)、燕雀之心、池田突波、海馬、かきもちり、

片羽 雲雀、凧ちひろ、まつりぺきん、ひなとど、おかもとか

も、石原とつき、さし、みさきゆう、中村マコト、石川聡、丸

山修平、鴻鵠之志、比島アルト、しろうも、蔭一郎、Tenko、ぱ

さ、藤井皐、嶋村らび、涼閑、はゆき咲くら、石畑由紀子、せ

ば、上崎、たろりずむ、のはるん、ユウ、宮坂愛哲、人見式一、

東ころ、岡村知昭、糸瓜囃子、ひうま、佐竹紫円、ぢゆぢゆ

梓川葉、証明、涼、阿笠香奈、ダリア、電車侍、海月漂、森

内詩紋、森砂季、hao、hao、月波与生(七五名)

◆ 7・7、5・7・5 (川柳・俳句)

星飛んで最果夕ヒを詣じる 花野玖

言いわけが唇よりもあつたかい 海馬

放置という胃を使わない愛し方 西脇祥貴

みえないをみるをみるをやめない中島みゆき

痛くないようにぬいぐるみを洗う 小沢史

本当に鳥葬ですか小鳥来る 馬勝

やんわりと口内炎が止めた嘘 しろうも

あんぱんは美味しく義理で観る舞台 東ころ

深爪の痛みに鶴が来てくれる 蔭一郎

もう悔やんでいるハハハの二度目のハで 雷

歯磨き粉ひねり出します人産みます かれん

小鳥来て共產党を宣言す しまねこくん  
書肆 きみと冬のすべてを祝いたい 上崎  
不自然な歯間ブラシの言葉数 おかもとかも  
まんまるの鳩まんまるの影を踏む 嶋村らび  
秘密とは黄色い蛇が抜ける道 丸山修平  
採尿の紙コップかな泡立草 菊池洋勝  
嘘泣きと言えずに続く終わりの会 中村マコト  
目潰しと金的以外栗の花 しまねこくん  
文法が多少違つても柘榴 しまねこくん  
成型肉がああと声だす十三夜 小沢史  
赤い<sup>ゴト</sup>はそれですか 西沢葉火  
俺のこと壊したくせにとろろ汁 馬勝  
ポスターの石田ゆり子も笑う秋 Tatsuo Kanase  
子供らの雨を蹴る音の虚脱 藤井阜  
バランスを崩した火炎瓶の味 藤井阜

ひとりぼっちで足音消して 朗読ムメイ  
瓦礫のなかにある子をつつけけらつつき syusya  
こんにちわ元気でなにより生前葬 うつわ  
秋天へ泡立つジェットコースター 星野響  
さみしいよ 化けて出てよ 百万遍 ゴトー  
心臓の方へ旅立つ日に縋る秋 天やん  
炭酸で割る過去の過去十三夜 池田突破  
落ち葉踏み見上げた空は十三夜 片羽雲雀  
バス停で待ち続けてたバイオリン まつりぺきん  
十三夜望遠鏡越しの握手 さー  
雑踏が沸騰してくハロウィン 石川聡  
ななあたたかいママビル 西沢葉火  
ホックを外す現場検証 まつりぺきん  
夕空に帰りを急ぐ鳥の群 涼閑  
階段の真裏を降りて帰るひと 石畑由紀子

星月夜終着駅で起こされし せば

Survival Dance／死霊の盆踊り たろりずむ

十三夜正義に善も悪もなし 宮坂愛哲

逝く夏の血の色赤き彼岸花 人見式一

彼女こそ砂漠づくりの匠です 岡村知昭

霜降や「ガラ仮」をまた始めより ひうま

残菊や夢の続きももう終はる 佐竹紫円

ひとりでもダブルベッドの端で寝る ぢゅぢゅ

泣きながらスマホで買った「かわいい」よ 証明

着れなくなった洋服の行き先 阿笠香奈

しあわせになれるかもしれない鴨渡る ダリア 220

土砂降りの中 独り 雨乞いの舞 電車侍

そつと奏でる上弦の月 海月漂

起立、礼（だれかしんでいる）、着席 月波与生

◆ 5・7・5・7・7（短歌）

とわんとわん炭酸水を注がれたグラスに月の光をゆらす  
かきもちり

雨粒が逆さに街を映し出す馴染むとは良いことなのか  
かきもちり

潮騒がヘッドフォンから漏れてきてみんな無言の満員電車  
蔭一郎

引き摺って運びきたもの棄て去って風に誘われ飛んでいき  
たい 何となく短歌

はりぼての城を横から見てみたら幾つもの目が梁になつて  
た 古城えつ

社会的意義ある壁にバンクシー 我が家の壁はやがて消され  
る 水の眠り

お迎えが来るまで勝負カード見て弱い役から革命起こす  
とるばどーる

目立たぬよう薄い衣に身を包み本音を隠して静かに生きる  
Take

割らせない 割れないはずだ その刹那 パリンと音が  
ガラスのハート 天天雷

幼稚園行事十月集中し天気は良いがユンケルを飲む 凧ち  
ひろ

秋虫の声を五月蠅く感じては鉛のように心臓（ハート）が  
重い ひなとと。

大きめを切手が必要をカモノハシな煮付け 石原とつき  
Suzuki 涙は勝手に落ちてくしお椀もお匙もこんなに遠い  
みさきゆう

秋空と鈴虫の音(ね)がコラボして現(うつ)のことを忘れ  
そうになる 燕雀之心

秋空の 透き抜ける青 溶ける風 心ほのかに つれづれの筆  
鴻鵠之志

もう誰も住むことの無い集落に咲き誇る花 群れる動物  
比島アルト

宵つ張り街の灯りが耐え消えず見失う星夜景に消える 元  
さん

いけないと言われたからなお食べたくて 追い出されても  
悔やんでないよ Tomoko

逢ひ見ての後の心に点る灯に憂世の闇に惑ふ身ぞ無き ぱ  
さ

「じゃあ、またね。」鍵はいつでも空いておくヒュツと音  
たて追い越してよね はゆき咲くら

足るを知る 在ることを見て生きていく欲は限りがないも  
のだから のはるん

り越えて行かねばいけない古傷が疼いたとしても踊り続け  
て 梓川葉

高齢の猫の口元よく見たら牙が片方だけになってた 涼

◆詩

なにクソと  
電線ピョンと  
跳んでやれ  
光は  
もう指の先 (温(温))

最初に君に話しかけた人は誰？  
その時の話を聞かせてよ。  
ねえ、覚えてるだろ？ 月 (ユウ)

命日じゃなくっても  
誕生日じゃなくても  
思い出したときに  
思いだしたらいいし、  
私はあなたを愛して (日本語にするとなぜ大げさになるのか) いたし (糸瓜囃子)

◆作品評から

不可思議な水を飲む ここはきみだよ やは  
「ここはきみだよ」と言われて自分の実態が確認できる。自分が想像できる範囲がわかる。でも本当にそれがボクかかどろかはボクにはわからない。また水道水を飲む。  
(月波与生)

人間失格その場しのぎの雨が降る かれん  
　　～句を読んで思い出したのは中島みゆきの『誰のせいでもない雨が』。他人からは人間失格といわれようと自分の最善は尽くしたのだ。「しかたのない雨が降る」ことはある。(月波与生)

潮騒がヘッドフォンから漏れてきてみんな無言の満員電車  
蔭一郎

～このうた好きです！(森内詩紋)

ぶらんこにのるゆれるのるおりのるゆれるのるのるきえ  
るゆれてる みさきゆう

～「る」の繰り返しと「の」が助詞に見える錯覚をうまく使っている。隣のぶらんこ絡ませてぐるぐるする遊びはなんとという名前なんだろう。(月波与生)

それぞれの河島英五で浮かぶ人 雷

～サラリーマン時代接待でカラオケタイムになるとほとんどの社長が大好きな「河島英五は歌うな」という暗黙のルールがあつたことを思い出します。(月波与生)

みえないをみるをみるをやめない中島みゆき 西脇祥貴

～自分の意思でやめられない感じがあつておもしろいですね！(森砂季)

とわんとわん炭酸水を注がれたグラスに月の光をゆらす  
かきもちり

～このうた好きです！(森内詩紋)

痛くないようにぬいぐるみを洗う 小沢史

～自分のぬいぐるみなのか、大切なひとのぬいぐるみなの

のか、あるいは誰のものでもないのか。

じんときました。(糸瓜曜子)

ひとりでもダブルベッドの端で寝る　ぢゅぢゅ

く『ふたりでも』にしたらもっとなみしくなる。(nao)

(nao)